

特別講演 2

「パーキンソン病の非運動症状」

藤田医科大学医学部

脳神経内科学 主任教授

渡辺 宏久 先生

パーキンソン病では静止時振戦、運動緩慢、筋強剛、姿勢保持障害、歩行障害、姿勢異常を代表とする運動障害のみならず、自律神経障害（起立性低血圧、排尿障害、便秘、発汗障害など）、精神症状（うつ、不安、日中の眠気、無為・無欲、幻視、認知症など）、嗅覚低下、痛み、衝動制御障害など様々な非運動障害に対する理解と治療が重要となる。非運動症状を把握するには、既に確立している問診票、例えば MDS-UPDRS Part I、Part II などを診察前に記載していただくことが有用である。治療については、多くの非運動症状はドパミン系薬剤の適切な調整により改善することをまずは認識する必要がある。また、非運動症状に対する治療薬は、運動症状を悪化させる可能性があるため、それぞれの症状に対する非薬物療法を同時に試みることが必要となる。当日は、様々な非運動症状の特徴と対応方法についてまとめてみたい。